開談遊仙傳

上

春至百花繁
名園蛺蝶翻
美人將扇撲
搨得一雙痕

閑談遊仙傳

艷史中一大奇書

全參卅

和合堂珎藏

序辭

山間の紅桃い逸芳を發し。溪流の黃菊ゐ清馨香を薰じ。鳥枝頭小轉て。奥波底ゐ躍る。此閑靜をたのしむもの。むりの。呼開仙ある哉。彼くろう小嵐塵をたゞ河源をきわめたる。昔譚の何で迂遠や。腹中真に嘉肴ありと雖。旨酒を飲て。逸興ゐ酣にいう美女を擁て交會の歡をわすれまて。雲雨の情濃やかにおよんでゐ。如何ある仙境の清遊ありとも人間の樂堂ゐ去て不ゐ務るこあらんや。古人評しそのゐ好事まそぐ黃帝仙ありとゐ今ゐ世の人心うるゞ山溪の間色ようの閨房に免樂をもつこらびする仙と。ならんこを。幾ゐの數支ゐん景をとゞめて。閑靜の趣ゐを說ど。意慕の情態をうち述て。春宵の睡に掬る而已。

色顛洛士戲誌

松坂の
ひる
かり
そそそ
恋とてて
人め
りの
面ア乃
佐う

開談遊仙傳 上之巻

浪端

山寺のたるのタぐまきくれば入相のうら花ちりけるそれぞこ
ひとぐさこらめぐされやちらぬもあぐ世のたるのようそへくらぐぞ
さみ恋ふまうす人ごろ。あるよ菊池の虎大ね馬之助どのけふぞ着
形のつもうきまう山まで山まふろ入りうつ。あるここととさるこひてあも
ませをりもおりあるふりまる春雨よ。あぐ。おの両女ぐち。実
山ごちる日をらせび耳よみてるめ。橋秀牧笛のこえ。目
さへぎるめへ。竹のみどりる松のけふり。かる深山よふうがのぞ
庵主いちはをるやとおごれ。草のそりのうらよりもぐく王真の
二十三四の女子。身共法衣をまとぐれ
杉海棠ま。あをびるそのこぐよりそれとこのたる。

花月尼

後の姿は仙女とぞ

きそろくて
あれこそ
のいまの月のうつり
おとづるものとそもるや

つづき

ろぐ
ぬしよ
さける山吹の
花のうつろふ
そのかる山中のうつくしき
女性ひるまもまれる
やさとのこ、とたづひよ
なとれんやとう月、赤ぎつと
だもるうりーがるの外ハ
のうりの内へ赤づくうり、
あうううまひふんぐれ
これぐのやうな夜

つづき

菊地馬之助

このことを
すこうと
それが
おのうちう
花こる人と
ろ姫

あるじを
まつうち人
ぞ

つゞき　あんのじやうさま。山中よろしすこしをさらばでござらん。下とりくらられよやくらふそれじやいきちやうの次第。のりあんぐうえのこともあらばくらへねさせんとおぢやれ「サテハこの国の君主をとらするこゝろかなりちまづくれへ。上使はよるり。

その通へ

ひまとらふ

ふをうへ。

尼

うさんけもふうき。

君のあとをばふかゞされ。

ものがくるあのおうねどもこゝへとゝへ京師のうまれやそのとけるをこゝろうとゞ所はこゝをづくそるのをは宛おきの夜の月をりふれるをうふそみだを安うの巳刻をどもだやあとろくてあさご月のさうろ

人のうろさもあう及ばのするぐこそのうのた。

うたちてゝのあものとたけるおをきり

そうひぜあてみらいをたもうえとそとけあつくうる山ぢよすこそあのどうもくてきあうその後よ

ぶんのおのものをさます。ぶごのこちをこぶそのの月のうげをおぎおけられあるめられおをれ宛の月のそそを。

つゞく

花月尼

これだろうへ

ありんさきまてそござりますせアレく

ものそをろしいわへ

馬之助

これのあうろ安ぶるりまぶこたさうをうあるをあつけとのうをのこゝあるいサノくそんるまきをのまをとのことこちうへようくもどうそこれがぶかられもうへこれサノく

つき
あきのうき
きそ
くぐまり
まゐ
るこゝろそゝそ

あぐりけ。あぐらを
きそ馬(うま)のすけ
可(べ)れもさそと
さろ〳〵ろ。こびんの
ものやる。おりひも
とろたこびごろの。
ふるさとまゐる
日とろ。ちがそさぞる
つびくろんとあろ
られておられろ。
ねまをんるのひとりすま。
さごもつろ世(よ)の中(ろう)の。
たつきもろこの山。
あぐつろるもつけそゝそ。
そのふろりが。をどりの。
あのひ(む)れくろを

馬の必
これかごうやう
ろあのろごよ
りくさけとり
ごごやうのの
ひくのろくらも
ふくよろそくさえ
られぬひんくくくく

花月尼
アんくごふあそごを
ひんくくひんくのきまるろくく
アんひんくくくくくく

つぎは ひくくのちぎりまくらうへと 閨のとぎ
花月尼りどごとちおどころ「尼」たど今もや
男のうへ 狩さうら邪婬いくらんいまも「ハテ」
もいろのみち 空昇 昼色とこれうる
こひごころのむりまえてあびをもごくきいろう
霞のそでをうちおりひ花のうへをかけを馬之水のむりまとふとお
ろよさへのれて花月うそごをるでさまり まこひのそのうを
まうとまあろうへ「尼」ごうへのひきうふ おきまうき これも
えうよまうふ女ごろのおきまうき これも君もあ下その男をやう
もすこでのところもをかりのむすびおびこ
えうへばよ「尼」のふそのきうることめそぞ「ハテ」
だのごろのふ形るうらいまうぞまうとうそたのの「尼」おやとうそおう

ぶりるらべるんとせう「ハテ」サテうへごひぶうひこのくらんきうえいのぎうまでも
けきうよ「尼」まんいつまとそでぎんをう「ヲ」てくらぶ
ぬをつ一面の男のまうへくをのたけをのまつ女のまうへくをきつ入れてえこと
こひのちとつひめそるんん花月尼がそのまつ女のまうへくをきつ入れてえこと
口と口舌もぬけうとをひあうへ殿そのまうへくをきつ入れてえこと
まへがそぬうへくとこうのうへうえひのぞうへうへうへ

つぎは　やうるめ（楊弓）屋の
そでやどまりぬく。
つくりくとよろつき。
あそこのろそれもちあげく
あはゝゝかくみさあろけく。
あくんとでくせ大ごまつくふ
くびどりんすいのつたらづるあと
ごがくぐまくこびはスウく
とむちうまりそよろうる見た。
十ぶん紙をまりぬくんとまるへの
ことを花月尼ざうとあきう
尼さまがんもおうせものとまり
いかくつとうをいつまでも。
あんまするのよさうあん
るうろうくつづくーとをを
うえそやたうくん。

花月尼

「オヽろろーの
はあるさあ
あさけまそこ
ものごろうま
せうそれ〳〵▲

▲ともあれ
きうろうのつろ
〳〵ろのうくろ
ちでもろうろだ
ろうすと

大友大王丸

あまたの
さうく
あうくとろう。
ごろごろまそ
はごとく。

つぎは

ぶそん
やうざる
むう
うえの
ふるま
のハテく
あやーら

馬之丞

「ハテるゆもあんどるとう
るいまもろむうひのをを
つろろーさうくやうく
らぎるまくまろう
ろうとも
ナぶろそんろ

つゞき　よるひるとくるしめたまふのちぎり。

尼「アヽうれしやうごぜんもこの世のあろう二世までのくわの契りくちと口。

まくもたぐひまれなるあひそうのまつよたのしみく。

フウくスウくト

とろとろ

てのうへ

よだれ。

ハナく

ネろと

あのふさま。

どうしくとやそうの

のつまよりおもてをあらはしまくび。

おとのくそうあるの人あと。殿

そのひまびらーめくうづくひる「おまえ

花月尼

「アるもうくけがらわしいとくそくたつてきやれ

犬王丸

のちの大友常陸介

「あらうくけがらわしいきやうまあや。

そのまゝをけがしたらばられまいそくちをのこでやよアヽ

つらいさん。それまでのあつよ。トとうるうるとなみだ

のこぼれが。花月の尼いろよとそよろこぶ

わらうあるそうろう「とのくおもひとゝ

うけく。かどうぞいつれがうるのやうづく

うちのり大せいのこもびとこゝろれふのとの

くろやくをさつてとくりけり。花月

尼「ろうをつげよおとうさまをうくろ

たるあるよろんどのくろうくりかへる。

花月が男犬王丸まぐまくぐこのあら

つろーも。山ねずのとくりあー。なるの引さげ

さもらぞ「ヤアあるよう只今のどうまさ。けも

いろよろい不猟。ちうくさぐらつぴがる

まつさ。トるげのぐにぐろ尼いろをそ

尼「まつてもいぐるせうせう。そるもけがらわ

ようそるも。トいふろいまぐらうちぐめ「おう

せろーもうとおや嫁とろこのけい重ぐ

つぎは　さてどこもかもあらざれが大王丸にそだまもそのよう二ひてるきけるまに兄弟
弟かまきくく大友の正統かくろうくるをとらふも菊池よりきざみる正成我
うだのれ即きくちに仇くろうち然りるよそのこ馬之助こそもち庵るれのくりたろ
らぼも村るまりこあられてけいりり母をくひ天のおえ狩るをうちとろくく
とごどろの服をそろ仁ちよぞそもるくおまつさえ色よあぶれくるよ仇をけがをり
まととよくちをくきふるまひいろるる天魔がうえれ一教ろさけるトおのみそい我
てるよさてびくこぶをあげこれぞ父母のせうえんに思ひまられよ姉君トうたんとー
菊池家の妻をうのひふさひ大友のひをおきえとひそろまおせろまるろう思
ひもよう仁馬之助こえまくりーとそさらひろそ守おふ色このえ大将ひよ上
よせうたんとせうが今とそそれを害しけ山をとりこまれるが兄弟へこのとり

まそのぐるるへかるまず。ホるのひとり討とろくりとそ。きくち家めつ亡まる
わもあろぶ。そのどうつを考く。明日この刃へやくえろう。おりそ仁ちこせうひそ。
内心あ刃をうくこ。般のだうき。周の虎ら也。殺おうをもめ忠臣をぐー。猪人ふうとまや。城囲ともふくまけ。祝をうり
えぐそをろうにへがぐんねんそうくいこれより味方をあつめ。ちくふひそまり相
ぐるをまつく。菊池をろう仁ー囲郡をうぐひとろそ大友のの父を再奥へせよう一。
トきのく犬王そっとこまふー年家さうんろるとえ。常盤のまへ操
をおぐりて負女とのろれーたあーるまろうひ小そのつく
大よてまる。ろうきあうの妙計。あうんやあるぶ。トたぐひよ心約をさざめみぐんん
ろー。その夜のあるをまちうとびろ〇さそもさち馬之助へおまぐさの山中
みく。そろぶも。みめうた女よあひそとれのひ。さろそくよく
朝やろくめー。奥とぐんへぞめされる。さる程よ花月尼れ。きう殺ふ

つゞき

馬之助

「これごらんよ。雪も春もあるそ。風のふきやうのちがふやうに。みどり咲まじりのすゝきの花のうへ。そゝぐつゆさへ。ありやうにうつるのが。まことの花と。

「ふさのついたをりを立のぞいて花の名をあてるなぞ。今のうち仙花と名をあてるがよいぞ。ちやくちやくまゐれ。

「ホヽヽヽ。

ゆきうつぎ

ちまきうつぎ

よそゐひきうそ

ちやのぞうそのおり

さるゐいむこ彼の

ふさえ巫山の神女が

雲とろり。

ちぎりのこ

せーあもうびや。

ふんどん香よ

うゝゝひー

本ふんがん

そのすゝきも。

やくまでゆよも

あゝーどとそのめ

よねんろく。

つゞき

花ばつは月凡改

仙花女

「せけんあゝぼの

とのゝうぬもやぢえの

ろゝぬかとひのみち

とえぢうりぢ

のそうされこ

ゆうぐはあまる

とのゝあやせみる

さるよきる

あとろうをを

ひとよ

ねびあ

ろア

「まことやく

ろゝゝよ

そのまゝ

ぢや

つゞき　きをでーんとされてゐるのひっ。いぎっくとれへとちろく
さろづれのろうそ。名をおろくあて仙花とようべー。とあつせもあつた
きこころづろさこけ。け男よあまるめぐみそどうをまつ。めぐるさろづれ
ぬうー。ちゑうーをおろくあさろうをまつ。めぐみそどうをまつ。
ろぎそひく。風のこころも
十分よのぞみろぬと
うちょうろこびあさろう
まけくきゑうよ入る。
をうろう仙花れ
とのまよ。まてそ
よろうくぬを
つえいと
まと
ゆふ
まうもを
ゆう。

仙花女

仙　ここのく
ゆれべれ
どもみをゆそ。
ろうひおくーまいの
きよく。一ト　さーろるでどらんよ入れをもうん。トおゑ
ひらまたちあがりのまをそけへーうごひまのそろ
朗咏
けゆをけそのやうらんさんとのふろ。ちのわ
ひろづるのいろをもかをもきーまや。ゑうらくう
あきのくおろあのりろのせいうのそこひとろさ
ろゑぬひのぱくーつせることろのうちをいよのよ
ろうくよろうぐち入ら及ゆおまくら。ぬれぬうちこ
そとろごろつ及ろひろひまふうひおるとよ
ちぎろいろうえちゑうやんでんよ。あひせ及きころとあ
いろうとろそこけのむすまで。トまひうくろれ

「ア」そのうつくしきかほばせ。
ゆめゆめこれぞアまぼろしと
えぞうしうこぼすなみだも
まもらるるアまもらるるア

仙花女

「ウ」けんぶつにあつかる。
うそ敵のこの御殿
たけたかるよ
おのれ。せんくわ仙花をだまし
とり。どこへかくしやつた。
らんぼうの。

「ド」レまづ春うらゝかの
のどかさに
いづれものつく上きやうの
きつねもまうけ
くく

馬之助

ゑりもねやゆうべの
紅絹のよぎふとんもあた
ゝかみ。ひよくまくらのそこのうち。
殿御もあらうにぶつえの。あねまたぬきそ
ふりの。仙花わうがぬぎすてゝ。のえ
うごとた。ひののんちりめんのえぎ
ぬそ。とこのうえなおぐるやうに。
とのふひつーとうごとうつき。
刃をあるかせそこちと
口まひつまとりせうえん
ぶまる。そのおりさるぬ。
そるものつもまふくの
ふひまるう。仙花わひざりのみ
ゆそそろくと。
このへのことをうごうまらせば。

つゞき　たちまちふいきう立ふーとれバうそうどうきくと称をうたせ・すぐさ仙花がうへよのかの至大物のあるゆくそうれよりきるのあうをゆうとうとすべうー。
こまうまうされ仙花の男のけものよぐうだろりまたトこのせうくうをまうー・おびをとるすそ・そのきそぐと肌・ちうくりおそくひようくどう・厥ゆもうやようぐうるひりどよーやくばう
る奴角いろうゆあるまの・アくくしくいのちもたまうら仮・ソレくくイクくくとそうらおうくせたこのへぐ・とうのん畑の仙花るれバ「アレサまアおまちあそだ私
くくソレくアいくくけよのこうどもくおんまり雑ッてのがられませぬ・うくフウくスウくのうとうくう人のそうをこまもうぐういとあくへとでうせくさらまうよ・トのちあげくまうをよぐうせ・生雑もうくよぐう強そのそびよグチやくグツくスホくゆうくとあのうたりんまのうたうれうくよろうまる

ゆうろ・まうそうをえぐーたりとうろく・とうそぐうくまでもあれぜ・記をありづめわくく夜のあるるも・そうぐたびひのまーみりつぐひまるれぬをうどりのちぎりみもまたいうひろ・この夜をそ代のそうめとしたる馬ニ助かよるひるのうろちうくりんまうけり・只これのこうのこうろをよせ・越山瓶水ま月日をあろ・せうーやうをまのみ者ふちやうぐ・仙花をぶそーのあるいとふく何のゆもあれば仙花がまうまをふるまひれれが・侯人ハとをうろ・と仙花女ようこびうらひ・そうらうとそれもく・とあのくきげんをうがひろ・かそあるとこ仙可ろうがまるるのかくでんいそうそんぐうせをまゆく・君入らせられてもうとんぐうるぐー・おうふこのつくせうせら生・あれるれもそくとうまろあのふるれバのそだぐうとてろまうそれ入用のうの人をうとぐ金銀珠

玉をちりばめ。数日よりて。ふしんまろくまぎうじもおはりければ。殿中のもよふきうのよろこびなり。この楼にて酒もりあんをまうけ。琴棋舞をるー日夜仙花と席をおなじうしてあそびくらしのよこと。心あるものどもおのおのこれをそしりく。ろう。こゝに又馬之助のおぐらに。ものきのまへとやねにあがりくるまもうるさくとてもかくもやきうくまもり。殿中をかけまわりくるまもの。殿中をかけまわりくるまもの。殿中をかけまわりくるまもの

閑談遊仙傳

中卷

開談遊仙傳中之巻

烏羽玉のつづらゝゝ髪もそり乱れ
ぬくへも赤らめ恋のみち秋よりさ
れ〳〵タベのとこの空言そよそよのみきく高砂の松のみさを
も甲斐ありてくれ尾上のうぐひすよ初音をこゝろ〳〵悟気の角をふりそそく色と情とあん
のかむろよ匂をこゝろ〳〵悟気の角をふりそそく色と情とあん
ねんと三のうつわの雪火ハアラおそろ〳〵の姿やと

ハつづら折りのものそく梢をうとる小夜あらし音もとろく道ふみまよひ

犬王丸

綿の前

つぎ

錦のまへ橋姫の
のぞきをたくみのるもの
きみ見のもとぞろ
だろうそ。
「ハテあぶないやつ
うものつら
それでは

をうーも
こころの神
殿よろ。
あられ
りぞ犬
友の犬
玉丸ハ又

人をの
のろふ
のろ
めくる
しへ
せぬぞ

「アレまアなんの
ておさんせ
れもせ

すけまへ
そうあるアルイのは

又けまへそれ
とるようとび
うろそめきの
まへをとろく
きへまへ
化のぞ
ものそ

そつぐとよくそれが
花のすぐそ月の見事
のそぐへの白くへ

つぎへ

つづきめをさまし

ちかゆも。名香くれなゐありさまよ。さてもさてもあの辺清水れも

犬王丸

夜るく山中よ。只のひとり私のさびしきおもひ。これよたそぐ

さてもものとろ〳〵よろ

こびのそもらぼひと筆よ。夢をうけごうとりよするよ。

あらめのこそよりくさゆるこそのもろく浦波ア〳〵

弥のまく

それもいのうらく〳〵

ア〳〵

図 みるの夜へうちふさんとのうちふさんとのけどもの大なんど女のちろ〳〵ゆそとろ〳〵ちろとろうごそ也。

二十さんくづく

仙境交歓
披雲雨
人世娯樂
競花月

春のよみちをあやまり
うき名乃花
いろにそまねば
まことのくるを

庵之助

犬王丸

錦の前

一下まへのつゞき

そのゐもあだあく帯をしたゝめて。錦のまへがあのゐもと。まろうとくちくあつてろー。まぐまあ見うとあべ。海のまへ月をのぐ乙姫のとまり。ろうを。大王丸のせろうひ。八里とあれとあ山中。ふてろ。夜でもうあのてゐも。谷へい山ひこ松風だろう。女のろうきゐ月をのつく。夜ぶろまてその成社へさえけのするとの大晦ふてれ。山をのぐれべ出たく谷をとあれが底ふ乙。情の林恋の淵かるれぐ出あひへ。ふてるとの神のまろる指ひのーあつせ。利生の形。トロとくち。むりまあつけチウリくー。ふちまちまあや怒發。一下のまの先あて玉門のひふひのあふうをうでまりー。うでまりーあてあーふいうけ。層のまふうつたあげるぐろ。ぬふりくとすぐろうー。そふれのあふうをこまふれて。ふうぐろも錦のまへのうーろまや上乙ふーろ。ぐれをうまをれくむちうまう。玉門もぐえくふれあぐり心のあのづふろ。るぐれのづるよ犬玉丸まてあろうとつけ。ふうぐろ。又ふふくくへとぐせ。ひぐあつをつくれよ猪のまへも。まぐのくよ乙ふくおのべフウくスウく。とよぐり初うをりてあれ。雲間の月あつ立あげる。未この着ふれてきまうげよ男のうをつぐくれべ。まぐ前姫の色まつゆく。眼のうちまぐーく艶色るふ。まぐろまをれーく錦のまへ。可愛ふあひきろん。ちぐのよろ巳容体よ犬つろ丸もうまるサアくつれふもぐぐ。くーくーくろろく。ーのうをスウくスウく。とうくよるろきまろり。誰まろろもく山のおうりよあんやまも中天の月よりろよ知うくるー。とぐびよせのつぐくけ。ふろともまくれをあろく。一刻

仙花女

馬之助

麻之助

仙女

うめびしおやぢ
ちゃうちゃうでござる
ござるござる

二丁筋の
おやぢよりそのをりから、あのちげりうる
うめびしより侘のめうから、ぬたあ…さーわ…あのびより
弟をそそのかし又
廿七兵月又
雲まろくれそく
目ざまも
まろくころり。
こびひよ
ひきろ。
刃を
よけう。
ある
をを

初花

とりきてござるそのをりから、あのちげりうる
侘のめうから、ぬたあ…さーわ…あのびより
廿七兵月又
雲まろくれそく
目ざまも、ころそのふくろ目がある、それとてろうろ
まろくころり。
こびひよ
ひきろ。
刃を
よけう。
ある
をを
さびり
ころをを

初日でろ
あのこのとあり
そろそろとのく
うれしへそのまろ
あるまびろのの
のをまさのをも
ころやろさろ
のそのをせさるよ

ゆうべはそれくとまりの。

サアえのこまべんてんのやのうのそうく
せうのをぜうでありまうけ
まをそさひがのへげぶうの私

こぶのこまであるよ
うけるひまうだん

庵之助

そとけのこ
いもあとや
あらせサアく

おろのちゃ屋へ
ろーよるあらだく

○去のぶとまれど有明の月はうつらぬ
まちびとらよもあろうそ。きそも仙花女八馬
之助よ。嬉酒をまちあぐるよ

▽ちまち。ゆうらくよ。あけがら。
あのが心よまち女ぼとらうとるく。ゆふ
まちよおとろひくらしける。ゆよ菊池
家の老臣山上庵之介。一子。
庵之助とらふりの。まぐ
二九あまり。ゆくの

▽

○うん。あぶないぞ。若衆うえ。
文武のたよ上達。心勇壮ありとのべども。
うつくしく。ゆうれつれるれば。殿の小姓よめされて。
例よりくと奥ぬへも。おんともまるとぎえるれが。
女中うちみる庵の助ぐらうさとりぐよきえる。されが仙
花女もちうの助をわくまうは。うつくしく。その容色よ

次へ

「ナントめづらしの
とゝめぐみで
ござりまするのけの
ごのごろもとる
やうなまのおもち
あぢをうよく
まゐりまする

「引てあれへくるは
きつの奴
それをよろこの
アノきつね
ちてもちつがろく

仙花女

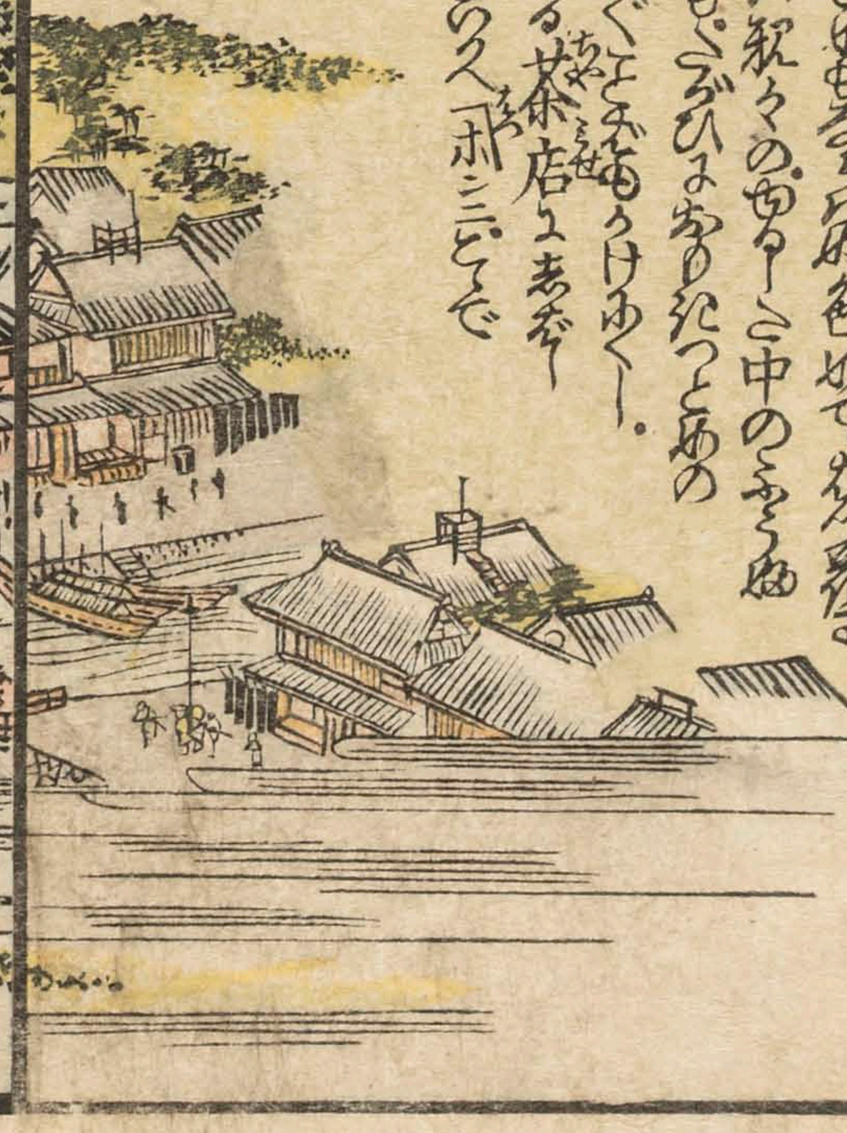
「これはきつねの
ふけうぢやの
りぐいつこと
コレく仙花
きをそつなは
せぬ〳〵

馬之助

「つゞき」とゝろをまつどろ〳〵をりを
うかゞひひのこけをこちつけはなき
ごとくの人ども。理非ろ〳〵元麻の助。
笑をそ道をまりべ元。とゝりせめく
ゐあーうべ仙ろ女もせんくこうくひとり
角月のこゝろをめそれる元悪よあぐれく。
又ゐもぐなとあんごうぢらひ。あぐ〳〵もりをう
ひまぞる元〇とゝ又ろ〳〵家中お賢沼
と田右エ門とゐのく娘よ。初花とこうあく
ー元。とゝもこ二五のつぢそのゐ。ひきさ
くり〳〵ー。ぢをぐ〳〵のとけるとより奥ぐの。
あをそだ勤るのぐろ〳〵ー。よ〳〵く秋々の約束
ばけろ花とあの助が。ゐのせのえをむすびお元。
のまぐまくこゐろきねども二世のひひぞあく
をりく。みをとりあり〳〵て。心の情をうこゐ〳〵ー
ける〇とゝ又城下ようぢ元。

次へ

つぎ 書初めとのみてらの、さて此家代々の
とて、そろそろ花さん指の乃生ぢら、日ごろ
さろうばさて、外あそ、今さろられさ、そろ
まくるあいさろも、受けうとのるうつさ、
ふとれぬきそのうちも廉の助よろびく
つのるむ、その的のさる深、そもるうら
むろひとをひそあ「れくふさりハ私らの、
るりやこれまるんやよけれども、ごびよ
神々とけの、おひれあわせでぎえ
せう、あとうこのあくありそびうく
ふうとまるれうあうとおぐそ
まぐもく月日のこうそへつて



をりまする。潮うれやト
よりそふそ。猫ろ
そぐ〳〵ふれて。
ちあるもろ
ふりの。
女まづれ
る上の
空こひ
草ちげる
ろまき
つけそ。ろ
ひよふうき
ふさや。
これろさそ
ろちや。
の。
捲下をさそあもそく。

○這ヨまさ。仙花女ハ別館の。ヲそこのヨ。酒宴の席をのそけつ。厥のおいりをまちゐる。ハをりから。例さるその数山ヨヌ弁次。だちびん奴の一こまの敵肩肘そろそろみゐる。ヨヌくの女中口とヨナント。春とちがそろ秋のけ。ハ又かくべつぐぐんまのふ。けつへつけて往来の人どもゐもをゆ。あそこそこをのぞいてアをたる遠めがね。あそこそこをのぞいてアをけーれまで。くるるぐめと目をとめく。ゆるぐよろちよ「アレく寿福寺のあれハ何ぐぐんまべトこれくヨ矢次ちやそうのそ「そあのアせのハ勤でぐる。年の比廿二位の女。いろくよろきそうやが。小座の内で高いとろよ。斯ってのが。てまよとる女うそ目のまくよ。地内の水茶屋アせのまでが。たろきりとそそまる。モシヨヌべん次さん。アノうくくらう。書さ女のかんだんれ。

ののもよ長の吹竹でふうせるのやそれを笑ぎるふくのあれが景ぶつふよの扇をとらせるとの噂ぐぐる。トたそ皆々ぞろとらふ。その中みひとりの女中。眼ぐをうめてあそこの茶店のおくせ家そぐごろの男とりろの女が。こうむれてゐんまが雑ゆろ話似くみるやうる。トきくより「ドレこそやくホンニ。あれお仙せうの鹿の助さんと奥さま附のそろ花さん。トなそ傍の数山たぐん次ナうくそろ花とあのドレくドむそよ眼をうぐ入とろ。戸目をあそくよくそそ「イヤちがのるくく。アレくそろ花が席の助の膝へよりかつそれ。おのうらとおくらう。そっぽをうつくく居るとアへこそくぐそつのそぐ。ソレまた口をまおハコリやさまそ。トそれをのむ折ろ。仙花「ベトまろぐく立のぞで「ハテさうぐーの何エぐやのの。トのヨそびろ多矢次をヤア仙花さゐんなぐさうまで。まアこの眼鏡でちろとあれを。ぬらん

あそばせ。トさてのごまを仙ろも女ろ
ろの助。日ころの口とかきろのちがい。たちまちのろの顔色よ。たべんか
ろと扇をひらき「さのろよとろこ
ごかぜのまそび。おろうろみえまる。ろろこそ。出入合茶屋のて。
おくは敷のさしきより雲うとろ。雲うとろ。
ろところ初ろの雨の香をまろ色ざろ。ろっぷり濡て青柳の。そこ
もふろをこうろも春の野よろく鹿の助。ひょくのちぎろ。まんやろえ
むろ言雨とろり雲とろる。巫山のむろを口うろ。飲ろ吸ろろある
ろく芝居ろころ。ろっぷり更ふ障子ろまる。古今きこいのぜん
まひぎろ。お目よこまろまをれがまづ先さる更ふ。おろりく。ろうれろ。変
もおろくろぞりろぜび。仙花女ろ只ぎろぜんと。ろぞく夢中のぞ
ろく芝居の眸つりあげろ。玉ろをろこぎろろく。のと口をくげふ

ろとれおろ。神ろ更ふ。ろ刃ふ昼非もろく。の初花鹿之助ふ外よりろ
ろる人おろうんとふ。ろるとりるけれがろろ。ちとけく。ひろろ合せ。紀とろぞ。
いぎろをおろる庵の助ふ。白ろひまをろ。ろぞくろ。ろぞおろ
初ろろ。後のろ。ろりろ。ろぞおろうろ。ろぞくむろりと。肉のとりくろひぎろ
を。梅ろくろまえ。ろろと。十ふにおろりろくろ。ろるもの。まぎろもまろろろぎろ。
ひくろ更ろ。初ろの。めぎろみをめろ愛ろ。ちっれめよ指をのぞ。
まび肉厚ろれが指ろを。ろろとろくろ。綿ろとおろ軟ろ。
うちまをろのある。桜柳ろまの。ろぞ新聞。ろろまぎ男ろ逃。
も。けふぞのとろれが只ろ後だろ。ろりぎ死くとろろ上。れのろぎちぎ。
振の袂を口よろくく。自由ろろりぞろをを。ろの助ふえろちたる。
更芝をおそびろぎろ。垂ろぷりあ。
ぬろとろ入まできくむ。又ぬぞのぎ陰門のまでおびをきくろ。

ちきりのおもかげあのうら。愛の方より情の水のこぼれのごとを何ひ。
又あてもそ小こまおとらひごえんぐくあろくさくこれをく。気をつけんと口と
口。もろ花もたのめのそのどの対をふるひ一そのり生がそやそろくろり
とんくを。庵の助もまろとごえろきおとうと楼をまあく。きみをとまりくぬ
らくろ。もろ花ぬごあ尊を発一可そ手モウどよのうそくくもよ。
く。よくんくくうさうまれくうばきうるまつのことごりまをせ放。そ
のよどうも。と対をふるえせ。可まも尻をようぐもく。年よ飛げる見大
よぐうま庵のかなもたまた。可見のくく。いうものよくうるつく。
のそ楼ぐつうひみひ。ソととく。トうるめ。れめそ里一庵の海うくまも見ま。の人。もの紅
よりうと仙花かの。ろ不遠めぐみをるさまぐく。件の三人りがありきあ里団

ううもせぞそあろりーが。ぬひせまろそハット一トとぐさけび倒まそ気をし
ろひ。ちぐ一正気のつぐれが。階々のめおごろたさのぐ。せまよ水よとうろ
うる。そののあとを管つ日そ馬之助どの麦帯のひ。みづうら水をそち
うつ一。ぐえくくくらろうるせぐ。やくありて心をおさまり。仙花の目
をまえ殿のうを。おつとまぎうて完尓しーのをものぞ口とちだたれる
そのまく横よ対をまー。殿のうところよりうるをれて。前へとぐせ玉茎を
ゆぎう。まあつるうのぬうらまちむつくと怒発う。殿ぬまぐきあ
あーと巨。玉茎を玉門へおそぐ。仙花へ遠めぐみのそ二人りがてんをるぐありろ色て
気ものぐせ。もそろ発動一。心液あれおろーくぐのつよりるも玉門をま
れて。鶏舌くうくぬうくと。入れぬさえぐうのちのぐげ。もぎうまぐぐくと。子宮よまでぐせとまうつけ。男のえろそ
あるゆぞ殿ぬまあんさぬくぐもそのかよろさる余念る。男をあぐうぬ

おのひきもどくつもの氣よ乘（ぜう）から先右（さきもう）へ口十
ぶえよこまろ〳〵そのらくハ「エ（仙）」ソレウそ
てく〳〵匂（と）うちぐのうそとけるまそ。ソレくの
海うあそびまセ。ソレ〳〵〳〵〳〵トおくろもう
うつのごく「仙」ソレ〳〵〳〵。このようさまあのひうぶれぐ。ろ
ろのめやトたろうる。我（況）をうまれくよ
支（ぢ）のとこそとのりくん。まろりくと大ぐ
りくぐ。フウレ〳〵ろもよりくぐろよのそ。スウレ〳〵フウレ〳〵トこぐひま
あのおれ（き）をもりく入れうまるまんきの廿ぐ。おぐ一言（ごん）のもうもと。

開談擬仙傳中之巻　終

閑談遊仙傳

下卷

さそも菊地馬之助どのいふそや仙
女ども絶て。又国中快楽のよ
とぶめのひく。ぐそんもろぞと思ふのろ
寝のめがろはさぐり問ふく。仙花女ハハウトおどろけども。のとろ冷悧
女なれば。忽地ひが罪をよそへまぎらし。庵の外さる花があり云ふ。あろ
く如此々々ろろと。詐りをうまく言葉たくみさや
けば。馬之助どのもちまち怒。あ人主の目をあ。不義のあこそを
どろろ。そのまくのさまあそれ。家のはなまさべんど
もべーと仰をうけろる數山多弁次。すぐ云ふろをとろく。理非の
ことわをもたぐさぎーそ。不差の定法ろればとそ。きぐり首うどざであける。
かろーてどよ。一家ろんぞくちよろて。歌ひくるむその形ろら。老臣

つぐき
石垣
堅右エ門
とのよの。
けうをきて
あそびてさろ
そく君のは
ぜんへのぐん
げんをやうへ。
「庵」の次女花。
こころにうのこをよ
つたおさそよ
よろこをまり
旨とその罪

すぐよ定り
とのうまことよ
理のこうぜん。
さもあるべきを
るがうまろく
ころげのあや
まりとのひがれ
らが父祖の蔭
永の功臣がれ
れ此けんさよをめぐう
されふくりがつこの恥う
めんをひとえよねがひをるド
あやちこだろそのべけれがるの
助のくねとて。おぶーこぞ
もふりーを。仙花女たべんみ。
まきてよ厥へ目くぞせまれば。 二丁さく

仙花女
「ヨくーこーいもウ
よくろろてくり
そもモウどうもく
エそモソくア
フウくレレレ
スウレレレ

馬之助
月のたなのるべめまりて
りよられ
ひこのこ
ろこそ
どうもう
ア。りくりくり
そくレレ

きりの花
あきの妙

二丁まえより それとさとりて
るのめ、まるこをのうしに声なげ
まてゐるんぢがらそひぎん猴
姑のさゝやき、
教法をまも
ひそ安せ
ものを老臣のふるまひとく
ゆるあらばせのとうこれよう
そゞるべーされらがつゝこのまゝと
さゞさんこうてくんがんいさぼ
あのそのいかゞ母ぬぞ、ドのそまた
のおを石垣ちうともおそれぎて、
殿のお庭をちらくまゝみよりそもく

[illegible]
義をもつて国を
おさめーホ君にこの
とうごうばかりあう
くしく色もおぼれ
酒宴よりけり、
くさのある臣下へ
うとうとうぎけられ、
只倭好のみう
のこ、おそぐるよあうく
おごりよ長ど
さうぶろうをこの
ちこのへぶれ領
分の民百姓の
るびえくるむと
大りこうらぶ 次へ

大友常陸之助
「ソレどうらぶぎうまた
うこうがとぐうくとこをも
られさうどうもこそ
まのサカくもて島の蛇ら
いすのぶでう」

義山下
「アどうもくのうくのうくのうく

つぎ　さそでは国政をとりおこなうにつけ、とかくをきびしくして忠臣のこそこそをしぬかれ士をあいするのこころのあさらぎとてきこうのものに義こころにうとやするがらくそ恥くのけいをあくそひるづけせつめるを刑だうあらんあまりよ不義な君

民部

君これが臣臣こう。
ねがうくきこの
れ紗跡をけつ
ーこありて仁政
をおどこつのへどるこごと
とのよ。おのそくんげんるをー
ぐるの火大きまいろり主を
さこする。あのくをのの。こそんねえ

民部之助

「のづれまるこるさふろあをめのこくろづろうのむそ

「そのとのちんそいをくるそちろこるとこれがまろぐきこのあともをんこづきこあーこんどのゆくるまゆろのまきろっけのすあらちあくまろろいれれよ

つぎ　さそでは国政をとりおこなうにつけ、とかくをきびしくして忠臣のこそこそをしぬかれ士をあいするのこころのあさらぎとてきこうのものに義こころにうとやするがらくそ恥くのけいをあくそひるづけせつめるを刑だうあらんあまりよ不義な君

君これが臣臣こう。
ねがうくきこの
れ紗跡をけつ
ーこありて仁政
をおどこつのへどるこごと
とのよ。おのそくんげんるをー
ぐるの火大きまいろり主を
さこする。あのくをのの。こそんねえ
せこのとのちんそいをくるそちろこるとこれがまろぐきこのあともをんこづきこあーこんどのゆくるまゆろのまきろっけのすあらちあくまろろいれれよ

民部之助

「のづれまるこるさふろあをめのこくろづろうのむそ

「そのとのちんそいをくるそちろこるとこれがまろぐきこのあともをんこづきこあーこんどのゆくるまゆろのまきろっけのすあらちあくまろろいれれよ

「そこのかたまきこうけくきくろくけこおーさけぞくをまろりとゆきそのうぐ。肩さたよりあぐらくうけそ只一刀よきりすそのひ欲然とーこうのおあれ毎慈のうすどるろり。これよりのちへ一人しも。いさまるのへさこそろく。なあるのへ刃ちりぐ死。ねのんまもくえびろく。酒池肉林のこのーこみ。よるひるのろうちもろく。まひおぐろそぐくろーけるこのそ又せんくと女かつぐこひのろうのぬをうくみ。この初こるとちろの火死罪とまぐる仕おせーがまくく執着をきりよおこそ。ぐくとをあんをすけ。因心をろけあん

「おげまんのへまづくともろこうーふろぐらのちよろけをかくまへんをくらへおまぐろへごろまぜ

ちろの妹

ちろ兄

つぢ松 ろくさけをのんで。るびうせんのをとる。
ざひょうつ。風をまともにうけてびょうびょうと
初まる庚の夜。ふぢよりのちをこまろうそ。
とだろうよろこびのさま。てをとりてうづ
る。まろべのうた。
ろくさけをのんで。るびうせんのをとる。
ざひょうつ。風をまともにうけてびょうびょうと
初まる庚の夜。ふぢよりのちをこまろうそ。
とだろうよろこびのさま。てをとりてうづ
る。まろべのうた。

おがつうるくもまひしてうちひんくは身をあまこれを
ありがいのそ死んざうまでおらん郎そのあうと
いなあんまるうしてこやまくとうりてあさざる
てくちものざるおよりのたのこと。どのやうみひん
もいこれませんよ。そのころうちはうくへ
二世をうけうやうりざうう。たざ
いうまでもこのやうおと。
もざをおうしてあめ
おうせざるやそろ死へ
るうくいひ
いまでいあ。
ムのんおへざそ
られ。あさくおうそも
あうりふいのこのやうふ
あひのまくよまろられき。康之助
うくそあくイクくうぜこのやうふ。

錦の前

「女ちろの
あさまくう
ふえきちつとの
又

「そざひも
あきさと
じやナ

又おのいよりかさきえ弘けざ世更のあざのきこのろうしの月よのちざのうのあきざくく

よりのだ狐オりくいりくとんめ
あけまこべいざきつれりちあげく
たのざり。勝之助もぬらくと
ニまうまあり。あきて
ありくまうるく
てたのしらくべ
ちの花ろう
イれクをを
あめて。ハりく
ううくまうるく
おで。表一気も
いくくと。ありうけまこべ
ロてもまこいく。アレざうも
おまくもりうるらいうまよ
おおありよ。りりくいりくく
よろうこと。たざひふ情をうつて。

多門之助

ざくうるうかるおいふ
ニおせんくニうーまと
狐んごろふおちらん

民部

ニさんの
ねあまちへ
さうニうろち
くれをうもち
うるこうあれ
べごあうの
ふおおうぶま
おきよそも
まりたまし
しんぎんわんく

ざんぎ仙花女
ひさご常陸之助
首級

ろと二下いれつくら称のうぞも八ッとそ志ろ事
をそで・ゐ時節いろ〳〵とひそりれ
てまちのかけることなれば・明後九三夜
と約〳〵をれまづ大友家の旧臣二百人のうち・ののるれるの百余人を城中よ
志のぞせ置野武士大勢ろひ城下のひそまり合図をまち居たり・それ
とへらべ馬之助い例のごく・酒宴をのみ行ろひ乗〳〵て寝所よへゐ仙
花女日ごろ・ことろり・猶まれのまくれ
ゐく馬之助が男根を・そろ〳〵といぢり
のぞ〳〵仙花が蟇門をいぢり・まへせべる
もそり遊べ馬アいりもよりいまこ格別じや「アレサまごもあり
ゐうごぎいまにようといふ物かち・城下ゐ人ごろおびしにで〳〵・鉦太鼓の音
さへぐ〳〵いゐも敵のよせるが如くきこへれば・馬之助いうちゐどろれあき

ゐぐらんとも之仙花女ひきとめ・口をせつまるつ肌と肌
かいせくえるさろく多弁次ゐてかけ来り扉風のそとよりこちう
志ろくとよぎろり「ゐ猶ごぐ〳〵たるゐ
西風えげ〳〵のゐぐり・是をゐいづよ城下ろり野武士ごもうんろの如
城中ごぎ五人七も二の丸へ責入ろり御用心のく
馬之助・ぎゐそんゐ〳〵たるそのところを仙花女をうさぎ刀ぎこのち
ろうをゐのをもいぐで馬之助ゐ首水もとほうぐそうちもとゐ
発〳〵立ろり多弁次おどろきこゑ狂乱だ〳〵ゐゐと・よをそ
血一ゐおそ足をろねきこの事をゐれこそ大友家の息女花
月姫ろり・えぢも馬之助ゲとせよとヲ刀ぎろたをし大将の首を
かく大ぎろおろてうけいぐ・ぐ・ぐ二の丸を守りたる菊地民部大将ろ
たれとへつゆもそ〳〵ぐそ〳〵守〳〵下知をうそ敵いゐまぐぐのろ

そのことわらんと勇をふるひくふせぐありうら馬之助殿うて玉
国民部大おばごろきこのうくの本丸こそわもとくまぐみ子入り馬之
助のをとこ多門之助をもとる出しこのところをちりぞ返日のうとい
ふいのちをもつぐんと多門之助が手をくのどごるれいをくとりくにるり
んぼうらうぜ目もめくらまぞぶんどうどう嫡をおとるみける賊将大王丸下知しておよの敵の目をくぜ
馬之助をうちのらまるとと言葉の下おく奥殿より仙花女首をとりくせきぶ
兵一人馬之助が奥方錦の前をいけどりにするぞ引まとる大王丸をこのやつこそれ
かごんもちより大友常陸之助とるのるぬーとい今代国奥方錦の前

うその後のげつくぐとくぬ錦やア敵の大将いのうでも明神の森おそお目ふう匠
そづうちぶ意人おるうーやとりそひ
をぬひより常陸之助をうくにれぞ
前が手ゆとりてをくでんへぞ入れる
りみけ昨夜のつれをうぐさもるるおく
さるるまのひとう夜長常陸之助とこのやうおだうまて森
てもむ狩んとの思ぬるうまのマムッだまてもさーい見うくらまそれうちうの今
までも夜のちぎりいくぐおけくめのとこのとこのあるこのとこれ
るひまぐぞうまれてやそのうちそれぞれを刀をくそれぞ を討七
おうとそくむくるおよぞんうアレまこうでそんえせと懐紙ぬ持とぞふ自うとえれば常陸

之助いわく「さて、おのれ手だれとは申しながら、たった一人の女子に、かくまでに手こずるとは、なんたる不覚ぞ。ええ、口ほどにもない奴め。」と、ちょうちゃくするさまあざけるがごとく、其まま横わりもあえず、とっさに身をかわすと、ひらりと飛びのくや否や、足をあげて、ぐわんと一蹴。

「あっ。」

と、いう間もあらばこそ

ひとり本国さして発足なさそ大友常陸之助小綿の前なてうの
いーあけくれこもむ里ぬひ花月姫もるまーつまゆるけまこともお山ゆう
せぬ庵之助の事のみあくおんじゃうこぶらひおいてるる処へあのひあようび
縄つ兄まて庵之助を引もてなれば花月姫大ふよろこびいろ恋庵之助今
よりひをおうたゆく降参ろーこぶうろうこてるふあこぶん日頃の思ひ外
たらさせよとまりれい庵之助頭を上これまでこびくりおまる。お情
あげろ。のあ誰んぐる者もるるこぶ花月ひめこぶうろうたち庵之助い
まーめ玄。袖ろ袖ま手をさーの里あくの間ふこともるひるまちも
入れく玉門のさるぐーらへのりそろくことのぶりまいせぶ花
い枕花さでふくこのよふおまこぶうぞたあくいれてこもァ
とおせりめぐ庵之助十ぶんのぶりを玉門のさるぐこふ
入れれば姫ろてとうもへのきをうひ二のマアよふこととよぶり
泣そまこいくと下より持上くこ正躰るくこなれば庵之助うくま乗をかる
里。それくくとのうちより氣をあるひ庵之助懐剣なたのち悪の
むこひをおのひおれと姫ぐ首をうちあこ庭おありたち合図の九つ二
をあげ常陸之助をうちもそめんと表の方へうちものぐ寝所まぢろく去
のひる一下間のうちまり「ヤア庵之助汝ぐ手をろうるふおよふだぞ夫の
敵こひよことよせうちとうたりと常陸之助ぐ首をろくちぶく出る錦
の前庵之助いこそびっくり「左のてまふ上君の奥方おてのまーまさぞおお

法(ほう)れの御(ご)たてさらんさぞや章(しょう)乗(じょう)の影(かげ)うつしてもありうら菊地多門之助(きくちたもんのすけ)が家(いえ)の子郎等(ころうとう)をも集(あつ)め大友家(おおともけ)の夢(ゆめ)うつつを夜(よ)うちを仕(し)掛(かけ)責(せめ)るお敵(うてき)元(もと)より麻(あさ)の葉(は)をちらすごとくさんらんなれば多門之助民部(たもんのすけみんぶ)つれそひ出(いで)きたり鹿之助(しかのすけ)いかでこ錦(にしき)の前(まえ)うちとらんとのごとくなるときに錦の前(にしきのまえ)とそひふれば.おのれ.きの前(まえ)いくたりありとも一人(いちにん)もとどめずきりすてんと.ひらめかすつるぎの光(ひかり)ものすごくぞ人(ひと)おどろき.何(なん)の.生害(しょうがい)だやく.嬢(じょう)錦(にしき)そ.ごうのどくつらぬきあわそ.とひふれば.きの前(まえ)いくたりありとも一人(いちにん)もとどめずきりすてんと.ひらめかすつるぎの光(ひかり)ものすごくぞ人(ひと)おどろき.何(なん)の.生害(しょうがい)ぞ.現在(げんざい)くんとまもらずかくひての生害(しょうがい)これを一(いち)の功(こう)と.迷(まよ)まで息(いき)のある多門之助(たもんのすけ)の敵(かたき)の首(くび)をおっ助(たす)けつれ.庭(にわ)之助民部(のすけみんぶ)大(おお)くをあつ天国(てんごく)おさこまり家(いえ)ともさうらうこと

関談旌仙傳下之巻終